

別傳愛國百人一首

市川浩

我が敬愛する土屋博理事長、今月の本欄豫定稿「愛國百人一首について」評傳を執筆せらる。先頃大東亞開戦七十九年を迎へ、當時の世相等記憶残るものに此の愛國百人一首あり、敢て失禮を顧みず、同じき主題に我が思ひ出の一端を述べむとす。

其の前に土屋評傳にて明かとなれる事御禮旁々御紹介せむに、川田順先生は愛國百人一首の撰者十二人の御一人にて當歌集が昭和十七年完成、公開後其の評釋「愛國百人一首評釋」を逸早く同十八年に出版せられたり。然るに同先生は其の二年前、同十六年に「愛國百人一首」を出版せられ、恰もこれが評釋初版にて、十八年版は其の増補本と思はるれば、歌集本體の完成時期との整合性に一抹の疑念を抱きをりき。今回の評傳にて十六年のそれは「愛國百人一首の薦め」とも言ふべき先生の「私家版」なるを明らかにせられ、年來の疑念氷解しつる事、有難く存じ上げ候。又後述の如く、「愛國」の文字面より、戦時中の撰録故、國家への自己犠牲的奉仕の強調との先入觀を拂拭し、眞の意味の皇御國への愛に溢るゝ歌々に感動措く能はざりけるは、撰歌のすめらみくに方針に「愛國の意義を廣義に捉へ、親子の愛、夫婦唱和の歌、國土愛の自然諷詠を含む」とありけるを評傳に明記せられ、さこそと合點行きたるも嬉しく存じ上げ候。

さて、吾始めて「愛國百人一首」の名に接したるは同じ昭和十七年、當時父の勤務先北海道札幌郡江別町（現…江別市）の國民學校四年生にて、次年以降の骨牌取り用として話題に上りかるたたり。然れど我が家にては特に新骨牌を購入せざりければ、如何なる歌が選ばれたるか知る由もなき儘、敗戦を迎へたり。戦後思潮は戦前否定一色なりければ、愛國百人一首は軍國民の滅私奉公を強調するのみの歌集に過ぎずとて、日常話題にも上らざりけり。

時移りて平成十三年、畏友佐藤利幸氏敬神崇祖と國語の復興を念じ、御自身設立の出版社「日さとうとしゆきひの本文化繼承」より最初の事業とて、昭和十七年刊、翌十八年改訂の「愛國百人一首早わかり」もとの翻刻修訂の事ありて、書名「たまのまひゞき」は三瀨信吾先生より頂き、小生は校正組版みつましんごを引受けたり。なほ原作編輯兼發行者の西川禎則氏他、關係者の消息は八方手を盡くすも知にしかはさだのりれずと云々。更に佐藤氏御本人も數年を歷ずして他界せらる。

校正組版には全頁一律の點檢を要すれば、百首の和歌一字一句は自づと目より身に入れり。流石當代最高の歌人先生方の撰、讀む程に我國古來の歌ごゝろの精髓に感嘆、此を評

價せざる戦後文壇の有りやうを嘆きたり。約二十年を閲し今思ふに、この和歌集は昭和八年の宮澤賢治大人の文語復歸より十年、漸く日本精神の神髓を凝縮せる、當に「新々古今集」とも申すべきに、撰者の方々は敗戦の故に「戦争協力者」の汚名蒙られ、本来の日本文化傳承の指導的御立場より遠ざけられたるは痛恨の極みなり。其の豫兆とも言ふべきは戦中既に英語の *basic English* に追隨せるにや、占領地住民に對する低級日本語政策にして、皮肉にもこれは敗戦と同時に自國民に對する「國語の民主化」となりて低級言語政策今に已む事なし。

〔附記〕平成十五年文語の苑設立に参加、當メルマガは同二十三年六月開始、同九月の第三號より「愛國百人一首を讀む」と題し解説を口語體にて連載、最初の柿本人麿より始めて最後の橘曙覽まで四十七首を毎月一首解説して、同二十七年十一月第五十三號にて完結せり。

(令和二年十二月十四日受附)